

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、二〇二二年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇二二年五月十一日

日本近世文学会事務局代表・春季大会世話人 柳 沢 昌 紀

大会プログラム

【日本近世文学会事務局・春季大会事務局】

【会場】中京大学オンライン会場

中京大学文学部 柳沢昌紀研究室

【行事】

〒466-0825 名古屋市昭和区八事本町一〇一—二

第一日 六月十一日(土)

電話 〇五二—八三五—七三二八(研究室直通)

委員会 (一一・〇〇〇—二二・二二〇)

メールアドレス info@kinseibungakukai.com

会場開室 (一三・三〇〇)

開会時間 (一三・三〇〇)

日本近世文学会創立七十周年記念シンポジウム 本学会主催・日本学術会議後援

シンポジウム (一三・四〇〇—一六・四〇〇)

「独自進化する？日本近世文学会の研究 ——回顧と展望——」

パネリスト

早稲田大学

中 嶋

国文学研究資料館

山 本

京都大学

河 村

東京大学

陳

ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学

ボナヴェントウラ・ルペルティ

ディスカッサント

大阪大学名誉教授

飯 倉

司 会

同志社女子大学名誉教授

廣 瀬

京都府立大学

藤 原

英 城

日本近世文学会賞授賞式・総会 (一六・五〇〇—一八・二二〇)

第二日 六月十二日(日)

会場開室 (一〇・〇〇〇)

研究発表会 午前の部 (一〇・三〇〇—一一・五〇〇)

1 常磐津男江口「花吹雪富士菅笠」考 —— 富士太郎と廓咄を中心に ——

東京大学(院)・日本学術振興会特別研究員(DC)

古 川

諒 太

2 『笈の小文』『おくのほそ道』序文考

豊橋技術科学大学

中 森

康 之

昼休み (一一・五〇〇—一二・三〇〇)

編集委員会 (一二・〇〇〇—一二・三〇〇)

研究発表会 午後の部 (一二・三〇〇—一六・二二〇)

3 寛政期「河太郎物」の発生源および成立の前後関係に関する一考察

ノートルダム清心女子大学 野 澤

真 樹

4 曲亭馬琴『羈旅漫録』の諸本について —— 十方庵大浄本を中心に ——

国文学研究資料館

木 越

俊 介

5 初期草双紙の料紙からみえるもの —— 高精度マイクロスコープによる観察を軸として ——

国文学研究資料館機関研究員

松 原

哲 子

6 『赤城義臣伝』成立の一側面

防衛大学校

井 上

泰 至

閉会 (一六・二二〇)

シンポジウム要旨

日本近世文学会創立七十周年記念シンポジウム 独自進化する？日本近世文学会の研究——回顧と展望——

京都府立大学 藤原 英城（司会）

日本近世文学会は、昭和二十六年（一九五二）十二月に第一回大会を開催し、昨年末に創立七十周年を迎えました。

平成十三年（二〇〇一）、学会創立五十周年記念事業を実施するにあたり、当時の常任委員会からは、本学会の早急に取り組むべき課題として、学際性、社会性、国際性の三点が提言されました（「日本近世文学会五十周年記念事業について」『近世文藝』74号）。それから二十年、わたしたちはそれらの課題にどのように向き合ってきたでしょうか。六十周年にあたる平成二十三年、高麗大学校（韓国）で開催された第百二十一回大会は海外にての初の大会として画期的なものでした。近時盛んに実施されるシンポジウムもそうした課題に応える学会の真摯な姿勢を表すものでしょう。

ただ、先の提言には、「本学会に代表される近世文学研究」のあり方を「文献的実証性を重んじ、学問的厳密性を追求する」と評価する一方で、その閉鎖性に対する危惧の念も示されていたことは記憶されてよいでしょう。

この度のシンポジウムでは、学会の存在根拠とも言うべきその研究のあり方について、過去の振り返りと現状認識に比重を置きながら、先人の学会エピソードなども交え、ざつくばらんに議論してみたいと思います。若手・中堅研究者に、よくも悪しくも古来稀なる学会の来し方を感じ取っていただき、これからの学会のあり方や研究を考える一助としていただければ幸いです。

パネリスト

近代初期（近世）散文研究の「学際性・社会性・国際性」

——西鶴を中心とした前期散文研究の問題点——

早稲田大学 中嶋 隆

「文献的実証性」は「学際性・社会性・国際性」に対立する概念ではない。戦前から研究実績のある学会草創期世代の研究者は、文芸学や文学史、ジャンル定義をめぐる論争をさかんに言い、そこから戦後の研究が発した。その枠組を崩す、あるいは補強する研究として、厳密な文献考証が重視された。その閉鎖性が問題にされるのは、文学史的枠組に対する位置づけが希薄な点に起因する。西鶴とその前後の散文研究を例にいくつか問題点を指摘したい。

実証的研究の普遍性と初学者サポートの必要性

国文学研究資料館 山本 嘉孝

発表者は、学部生としては米国で理論的研究、院生としては日本で実証的研究の手法を学んだ。デジタル画像の公開等を通して原資料の存在感がますます高まっていくはずの将来を考えれば、今後求められるのは、理論ではなく実証であろう。したがって現状では、理論的手法よりも、実証的手法のほうが、学際性・国際性・社会性に優れているように思う。ただし、実証的手法は、丁寧な手ほどきを受けなければ身に付けることができない。本学会は、初学者のサポートに全力を注ぐ必要がある。

俳文学研究の課題と展望

——近世文学研究の今後を考えるために——

京都大学 河村 瑛子

『近世文藝』創刊号には板坂元氏による「複製「夜の錦」」が載り、以来、俳文学研究は日本近世文学会の研究の一つの柱として成果が蓄積されてきた。学会創立五十周年以降急速に進んだ資料・技術のデジタル化は、俳文学研究にも新たな形での進展を齎している。一方、『近世文藝』において俳諧を主対象とする論文は近時減少傾向にあり、その意味を考える必要があるように思われる。本発表では、当該分野を取り巻く状況や課題を確認・検討し、今後の研究の有り様を考える一助としたい。

より積極的な発信と、他分野との交流に対する期待

東京大学 陳 捷

学問研究は既知の資料に対する新しい解釈と新資料の発見により発展するものであり、主に文献資料を媒体として現代まで伝わってきた近世文学を研究する際において、文献の実証性を重んじることが、「閉鎖性」の原因ではない。研究の深化に伴う高度な専門化と細分化に満足することなく、社会に対してより積極的に発信し、他分野との交流や共同研究を進めることは、学会の一層の発展の為に不可欠のことと思われる。

日本の近世の舞台芸術をめぐる研究について

ヴェネツィア・カ・フオスカリ大学 ボナヴェントウーラ・ルペルティ

日本での近世文学研究は、文献の実証性を重んじ、学問的厳密性を追求するという基盤と方針で進化した。そして、近世の文芸は特に、先行作を意識して発達してきた第二次的な文学だからこそ、歴史的認識を通して、作品論、作家論を中心に、先行作品からの影響、出典を追求する「典拠論」と、江戸時代という歴史的現実と社会的対象との関係、題材にされた同時代の出来事を解明する捜査という二つの柱を軸に進行してきたのである。特に舞台芸術をめぐる研究について、その成果を振り返り、今後の展望を述べてみたい。

常磐津男江口
女西行花吹雪富士菅笠」考 —— 富士太郎と廓咄を中心に ——

東京大学（院）・日本学術振興会特別研究員（DC） 古川 諒 太

宝暦八年三月に江戸市村座の『恋染隅田川』こいぞめすみたがわ一番目で初演された常磐津「男江口花吹雪富士菅笠」は、富士太郎と歌比丘尼が廓での口舌の真似事をした後、歌比丘尼実ハ普賢菩薩が富士太郎に父の敵浅間の手がかりを教えるという浄瑠璃所作事である。本発表では、本作の浄瑠璃史上における意義と、『作者名目』以来、本作が堀越二三治の代表作とされて来た理由を考察する。

能『富士太鼓』『梅が枝』や浄瑠璃『粟島譜嫁入雛形』あむしまけすよめいりひながたなどの富士浅間物の先行作では富士の妻か娘が敵討ちの主体だったが、本作は息子の富士太郎を創出して敵討ちを担わせたところに画期性がある。『世界綱目』では富士太郎を「富士浅間」の主役に掲げており、富士浅間物の世界形成に本作が寄与していることがわかる。また本作の眼目である廓での口舌（廓咄と称する）は、「恋ばなし」を「しかた」で見せるものであり、元禄歌舞伎以来の仕形芸に連なるものである。一方で本作は能『江口』の書替狂言としての「やつし」の趣向をも有している。このようにやつしと仕形を重ねる手法は、例えば二三治が立作者を勤めた『二十山蓬萊曾我』はたちやまほうらいそが（宝暦九年正月、江戸市村座）のせりふ正本「くるわうたしかたまんざい曲輪哥仕形万歳かけあひせりふ」にも見出すことができる。

「花吹雪富士菅笠」は何度も再演され、多くの黄表紙や合巻にも受容された。そこには富士太郎を主人公とする「富士浅間」の世界が演劇と文芸の両方において定立する様相を確かめることができる。

『笈の小文』『おくのほそ道』序文考

豊橋技術科学大学 中 森 康 之

日本近世文学会二〇二〇年度秋季大会において、支考『葛の松原』冒頭の芭蕉古池句誕生物語は、芭蕉が確立した俳諧の表現原理（芭蕉流）をよく伝えるものであること、またそれが『去来抄』や『三冊子』ともよく通じるものであることを明らかにした。

本発表は、その表現原理を『笈の小文』と『おくのほそ道』の冒頭部分（以下「序文」）から読み取ろうとするものである。さらにそれによって見えてくる「序文」の意味についても私見を述べたい。具体的には以下のことを明らかにする。

- ① 「序文」は芭蕉流表現原理に基づいた描写であること。
- ② 芭蕉流表現原理は、『莊子』や禅に見られる〈存在〓空名〉観（井筒俊彦）を基にしたものであること。

- ③ 「序文」は、主人公がどのような認識〓表現主体であるかを読者に語ったものであること。
- ④ 両紀行文は、「序文」で俳諧における理想的な認識〓表現主体（主人公）を設定し、その主人公が旅をしながらどのように世界を見、聞き、感じたのか、それをどのように言語によって表現したのかを描いた構成となっていること。

またその過程で、「百骸九竅」、「一」、「そぞろ神の物につきて」の意味、また、なぜ「かりに」名付けるのか、なぜ『おくのほそ道』「序文」には受け身表現が多いのか等についても明らかにしたい。

寛政期「河太郎物」の発生源および成立の前後関係に関する一考察

ノートルダム清心女子大学 野澤 真樹

本発表では寛政六年正月序『川童一代噺』（佐藤魚丸作）、寛政六年九月序『戯動大丈夫』（鉄格子波丸作）、寛政八年正月刊『通者茶話太郎』（同前）の三作品を考察対象とする。

右の三作品は大阪の实在人物・河内屋太郎兵衛（天明八年没）の逸話で構成されており、そのうち鉄格子波丸の『戯動大丈夫』、『通者茶話太郎』には各巻の挿絵に複数名の発句もしくは狂歌が記されている。『戯動大丈夫』、『通者茶話太郎』の発句・狂歌の作者、および序跋等の人名から、『通者茶話太郎』は作者・鉄格子波丸の属す丸派の狂歌師集団から発した作であることがわかる。また、『通者茶話太郎』には『戯動大丈夫』よりも多くの人物が関与しており、『通者茶話太郎』の出版が一定の計画をとまなうものであったことが推測される。

東京都立中央図書館蔵『通者茶話太郎』には、第四丁に他の諸本にない異版が混入しており、『通者茶話太郎』は寛政八年正月の出版の前に一度版を改めていると考えられる。本屋仲間記録には『川童一代噺』の開版願が却下された際、同種の作として「夜半太郎一代記」という作品に関する記録が残る。『通者茶話太郎』の異版の存在と作品本文から、従来『戯動大丈夫』と同一と考えられてきた「夜半太郎一代記」が『通者茶話太郎』の前身であり、『戯動大丈夫』よりも先に計画され、成立していた可能性を指摘する。

曲亭馬琴『羈旅漫録』の諸本について——十方庵大浄本を中心に——

国文学研究資料館 木越 俊介

曲亭馬琴『羈旅漫録』（享和二年（一八〇二）成）は、諸本中に、「十方庵大浄という者の手によって、内容が大幅に改竄された本（馬琴西遊記本）が存する」（『日本古典文学大辞典』当該項、濱田啓介執筆）と、はやくに異本の存在が指摘されていたものの、これまでに具体的には注意が払われてこなかった。

十方庵大浄（一七六二？—一八三二）は江戸の僧、文化九年（一八一二）に起筆された紀行的地誌『遊歴雑記』で知られるが、『羈旅漫録』書写はその翌年であり、その際に新たに付した序には「その旅中の先々風俗方言古跡等予も書留置しまゝに、此書（※羈旅漫録）のくさくさ符節のあひて又おもしろく」と馬琴記事への共鳴が示される。十方庵は寛政九年（一七九七）に既に上方に赴いたことがあり、馬琴の本文をどのように改変しているのか、一度は検証が加えられるべきものと思われる。発表者が現在までに確認し得た『羈旅漫録』の写本は十八本であるが、本発表ではまず諸本全体を本文から複数の系統に整理する。うち十方庵系統は七本を占めるが、改変箇所を具体的に検証したところ、十方庵による情報や感想、見解などが断りなしに大幅に加筆されている条が複数認められた。これらの異文は馬琴本来の本文に紛れてしまい、書写態度としては問題視せざるを得ないが、その内容は風俗風習や食文化に関するものが多く、見方によっては、馬琴が書き記した情報を補う同時代の貴重な記録として捉えることも可能であると考えられる。

初期草双紙の料紙からみえるもの

——高精度マイクロスコープによる観察を軸として——

国文学研究資料館機関研究員 松原 哲子

草双紙の享受の実態を探る上で伝本の初摺・後摺の判別や年代特定は重要な課題である。改装本の判別が困難なのはもちろんであるが、後摺本は装訂からそれと認定できても、刊行時期に関わる情報を得られないことが多い。本発表では、それらを打開する試みとして、三田村彦五郎署名入りの伝本（いわゆる三田村本）をマイクロスコープによって観察した結果を軸に、初期草双紙の料紙の性質を整理・評価する。

彦五郎は宝暦から明和にかけて草双紙を入手したと見込まれる。彦五郎署名入りの国文学研究資料館蔵『伊勢風流／続松紀原』は後摺本で、初摺は明和三年刊で、初摺刊行と近い時期に入手したと推定される。板木の摩耗は少ないと見込まれるが、摺りは良好ではない。観察の結果、料紙にはある程度の反古の使用、紙の材となる植物の破片の点在等が確認された。また、夾雑物が料紙の平滑性を損ない、印刷にムラが生じていることも確認された。従来、摺りの状態を検討する際、使用された板木の状態を探ることがまずなされてきたが、料紙の品質もまた摺りに大きな影響を与える要素であるといえる。

後期草双紙では異なる性質の料紙が使用されたとの指摘もある（佐藤悟「『修紫田舎源氏』の絶板と用紙」（『書物学』19、二〇二二年二月）。初摺と後摺の比較に加え、時代の異なる草双紙や、同時代の他ジャンルの料紙の観察結果と比較することによって従来の研究を補い、進めていく試みのひとつとする。

『赤城義臣伝』成立の一側面

防衛大学校 井上 泰 至

防衛大学校図書館所蔵の、有馬成甫（旧海軍軍人・古砲術研究家）文庫には、尾張藩兵学者近松茂矩の著作がまとまってあるが、その中に『倭書読範』（享保十一年自序）なる新写本（平出鏗二郎・石田元季旧蔵本の写し）がある。墨付き十九丁。兵学を学ぶ藩内の者に、読むべき史書・軍書をリストアップしたもので、それ自体享保期の軍書の流通・受容を考える上で興味深い資料だが、末尾に片島武範『赤城義臣伝』（享保四年序）の成立にまつわる注目すべき記事があるので、これを紹介し、検討する。

『倭書読範』によると、予てから赤穂事件の資料を蒐集していた近松は、火砲術の師である片島に、赤穂浪人十七回忌の享保四年を期して、義臣伝の執筆・公刊の志があるのを知り、室鳩巢『赤穂義人録』・浅見綱斎『忠士筆記』等を師に提供した。当初序文は、穂積以貫・平住専庵・片島・三好弥五郎が各々書いたが、片島の要望で三好の分は、近松の文章に差し替えられた、という。さらに、最初に出された片仮名本に次いで平仮名本が出されたのは、討入前日の大石内蔵助書簡を片島が入手して増補したことによるなど、今日残る諸本の状況に照らして、近松の証言は確度の高い情報であることが見て取れる。

以上の成立事情を踏まえて、『赤城義臣伝』の性格が、片島の火砲術は無論、近松も学んだ武田流兵学や闇斎学と関連するものであることを報告する。